平成２７年１１月１３日

平成２７年「まほろば会秋の見学旅行」資料

三河・遠江・駿河を巡る旅（岡崎城・駿府城・登呂遺跡ほか）

平成２７年１１月１３日（金）～１１月１５日（日）

まほろば会

はじめに

今回の見学旅行は、日本に驚異的な平和な時代をもたらした、あの「徳川家康」に焦点を絞った企画としました。昨年に続いてまた「近世のお城」？と思われる向きもあろうかと思いますが、「家康没後４００年」のこの機会こそ訪問の絶好機と考えました。
さて、徳川家康と言えばまず――

人の一生は　重荷を負ひて遠き道を行くが如し　急ぐべからず
不自由を常と思えば不足なし
心に望みおこらば　困窮したる時を思い出すべし
堪忍は無事長久の基　怒りは敵と思へ
勝つことばかり知って　負くることを知らざれば　害その身にいたる
おのれを責めて人を責むるな　及ばざるは過ぎたるよりまされり

皆さんご存知の「家康公遺訓」ですね。見学旅行初日に訪問する「岡崎城天守」の前に、この遺訓と遺言の「石碑」を見ることが出来ます。江戸時代、岡崎城は「神君出生の城」として神聖視されました。将軍、そして「神」への長い道のりが、この城から始まったのです。

徳川家康は１５４２年、松平広忠の嫡男として岡崎城で生まれました。１５６２年、尾張の織田信長と同盟し、１５７２年に「三方ヶ原の戦い」で武田信玄に大敗するものの版図を広げて、１５８４年の「小牧・長久手の戦い」では、当時最大勢力を誇っていた豊臣秀吉を苦しめました。そしてついに、１６００年には天下分け目の「関ケ原合戦」に勝利し、１６０３年征夷大将軍に任じられ「江戸幕府」が成立しました。
ここに、１８６８年の明治維新まで２６５年にも及ぶ驚異的な平和な時代が始まったのです。

今回の旅行では、ここ岡崎城をスタート地点として、信長が３，０００丁の鉄砲で武田勝頼の常勝騎馬軍団を打ち破った「設楽ヶ原古戦場」そして「長篠城」を見学し、２日目には「出世城」で有名な「浜松城」・家康が武田信玄にコテンパンにやっつけられた「三方原古戦場」・家康終焉の地「駿府城」などを巡ります。その日の宿は天下一の景勝地、清水の「三保園ホテル」を確保しました。そして最終日に、神君家康公がご祭神の「（国宝）久能山東照宮」をたっぷりと時間をかけて見学し、とりは当会では数十年ぶりの訪問となる「登呂遺跡」を「高川博先生(幹事)」の解説でお楽しみください。

幹事一同

平成２７年度　まほろば会秋の見学旅行（三河・遠江・駿河を巡る旅）予定表

＜日程＞　平成２７年１１月１３（金）から１５日（日）までの２泊３日の旅行です。
＜集合＞　１１月１３日（金）１０時までに東海道新幹線「三河安城駅」新幹線改札出口付近に集合します。
　＊全員集合ののち「名鉄観光バス」のバスに乗車し、下記「見学予定地」を回ります。
＜解散＞　１１月１５日（日）１５時ごろ東海道新幹線「静岡駅」にて解散します。

＜見学予定地＞

１１月１３日（金）	岡崎城	岡崎市康生町５６１	℡０５６４－２２－２１２２
（昼食）	「大正庵釜春」	岡崎市中岡崎町６－９	℡０５６４－２１－０５１７
	伊賀八幡宮	岡崎市伊賀町東郷中８６	℡０５６４－２６－２７８９
	設楽ヶ原古戦場	新城市長篠	℡0536-32-0022（新城市観光協会）
	長篠城跡	同上	
	長篠城址史跡保存館	新城市長篠字市場２２－１	℡０５３６－３２－０１６２
（宿泊地）	「ホテルクラウンパレス浜松」	浜松市中区板屋町１１０－１７	℡０５３－４５２－５１１１
１１月１４日（土）	三方原古戦場	浜松市北区三方原町	
	犀ヶ崖古戦場	浜松市中区鹿谷町２５－１０	℡053-472-8383(犀ヶ崖資料館)
	浜松城	浜松市中区元城町１００－２	℡０５３－４５３－３８７２
	浜松東照宮	浜松市中区元城町１１２－２	℡０５３－４５２－３００１
（昼食）	「うなぎ藤田」浜松駅前店	浜松市中区砂山町322-7 ホテルソリッソ浜松 2F	℡０５３－４５２－３２３２
	駿府城	静岡市葵区駿府城公園１－１	℡０５４－２５１－００１６
	静岡市文化財資料館	静岡市葵区宮ヶ崎町１０２	℡０５４－２４５－３５００
	静岡浅間神社	同上	
	賤機山古墳	同上	
（宿泊地）	「三保園ホテル」	静岡市清水区三保２１０８	℡０５４－３３４－０１１１
１１月１５日（日）	久能山東照宮	静岡市駿河区根古屋３９０	℡０５４－２３７－２４３８
	久能山東照宮 博物館	同上	℡０５４－２３７－２４３７
（昼食）	「開花亭」	静岡市清水区由比町屋原６０８	℡０５４－３７５－３０５５
	登呂遺跡	静岡市駿河区登呂５－１０－５	℡０５４－２８５－０４７６

家康ゆかりの地を巡るにあたって

今回の見学旅行では「徳川家康没後４００年」をテーマとして、生誕の地「岡崎」から終焉の地「駿府」まで駆け足で巡る企画をしました。見学先の詳細は後のページに譲りますが、ここでは「予備知識」的な話題を取り上げて若干の解説をしたいと思います。暫しお付き合いください。

Ⅰ．家康は主家を滅ぼした「腹黒い狸おやじ」？

・１６１４年、豊臣秀頼が建立した京都・方広寺の釣鐘の銘文に「国家安康」「君臣豊楽」とあるのを「家康の名を引き裂いて呪詛するもの」と言いがかりをつけて大坂冬の陣を起こす。さらに講和の際、外堀だけの約束だった大阪城の堀を内堀まで強引に埋めて裸城にし、翌年の夏の陣で豊臣氏を滅ぼしたとされる。ドラマなどでは、腹黒い狸おやじというイメージで描かれることが多い。

・こうした家康像は、どうやら修正が必要なようだ。方広寺の鐘に関する家康の抗議は「筋が通っており、捏造などではない」という声が上がっている。証拠は、銘文を選んだ僧の清韓が残した弁明書だ。清韓は「国家安康と申し候は御名乗りの字をかくし題に入れ」と記し、意識的に「家康」の２文字を入れたことを認め、祝意を込めたと主張する。だが当時、人をその諱（いみな）（この場合は家康）で呼んだり、諱を無断で鐘銘に使ったりするのは礼を失する行為。「一方の『君臣豊楽』では豊臣の文字を入れて秀頼や秀吉などの諱は使っていない。呪詛と言われても仕方ないのではないか。」（国際日本文化研究センター教授笠谷和比古氏）

・大坂夏の陣の後に行われた堀の埋め立ても、外堀だけの約束だったのを徳川方が強引に内堀まで埋めたとされるが、当時の第一次資料にはそうした記述はないという。「二の丸や三の丸の埋め立てには１か月以上を要しており、その間にトラブルが生じた様子もない。豊臣側が止めるのを押し切り、徳川方が勢いで埋めたというようなことがあったとは考えにくい。」（同上）

・家康は元々、豊臣家を滅ぼそうなどとは考えていなかった可能性が高い。関ケ原合戦の前に、のちに東軍に属する武将が集まって行われた小山評定は、当初は石田三成の謀反を鎮定して欲しいという増田長盛や淀殿の要請に応じる形で方針が決定されており、関ケ原後の領地の再配分も、あくまで五大老の筆頭という立場で行っている。「領地の給付状況をみると、西日本には徳川譜代の大名がまったく配されていない。家康は東日本は徳川、西日本は豊臣という『二重公儀体制』による全国支配を考えていた節がある。」（同上）家康が征夷大将軍に任じられ、それを息子の秀忠に引き継がせる形としたのも、「秀頼には将来、秀吉と同じく公家の最高位の関白になってもらい、将軍と関白という二つの権威でそれぞれ日本を治めようとしたから。」（同上）と推測される。

・では、なぜ家康は豊臣氏を滅ぼしたのか？「彼は二重公儀体制を志向しながら、自らの死後実績のない秀忠ではそれを支えきれないと危惧していた。」「豊臣の一大名に戻れればいいが、徳川家が滅ぼされてしまう可能性の方が高い。悩んだ末に踏み切ったのだ。」（同上）

○会員の皆さんはどうお考えになりますか？

Ⅱ．家康が居城を岡崎から浜松に移したのは何故？

・家康の「天下取り」のためには、まず武田信玄を倒さなければならないと判断し、浜松の地を選択した。三方原台地の東南端に「浜松城」を築城し、駿河・遠江経営の拠点としたのである。すなわち、甲斐の武田信玄が駿府に攻め込んできたのに備え、遠江一帯を見渡すことが出来る「三方ヶ原の丘」に注目したのである。

・元亀三年（1572年）におこった「三方ヶ原の合戦」は、関ケ原の合戦に並ぶ激闘で、家康は命からがら浜松城に逃げ帰っている。結局、家康は２９歳から４５歳までの１７年間を浜松城で過ごした。その間、姉川、長篠、小牧・長久手の各戦いも浜松に拠点を定めていた期間の合戦であった。浜松城在城の１７年間は、家康にとって徳川２６０年の歴史を築くための必要な時代だったのである。

・浜松城は南北約５００メートル、東西４５０メートルで、三方原台地の斜面に沿って築城された。西北の最高所に天守曲輪、その東に本丸、二の丸、さらに東南に三の丸と、ほぼ一直線に並ぶ「梯郭式」を採用している。「梯郭式」とは、隣接した各曲輪が階段状になっており、本丸の背後が自然の防衛線になる城郭が主に採用した様式でもある。

Ⅲ．由比正雪が起こした慶安事件とは？

・関ケ原の合戦以降、江戸幕府は命令に従わない諸大名を次々と改易・減封で処分し、自らの権力を確立していった。処分の対象となった大名は、外様のみならず、譜代・親藩にもおよび、家康から家光までの３代で、改易された大名だけでも優に１００を超える。改易・減封が幕府の威光を背景に専制的に行われたことから、家康から家光までの政治を特に「武断政治」という。

・諸大名への改易・減封が繰り返されるたびに、巷は浪人であふれ返った。幕府に対する不満は、浪人たちだけでなく明日は我が身かも知れない武士たちの間にも広がり、そんな中から幕府の武断政治に異を唱えて立ち上がったのが「由比正雪」である。

・正雪は、江戸で旗本や大名の家臣に軍学を教えていた高名な軍学者であった。出身は駿河で、東海道由比宿（静岡市清水区）にある紺屋（染物屋）に生まれたという。慶安４年（1651年）４月に家光がこの世を去り、幼少の家綱が四代将軍に就任すると、これを好機ととらえた正雪は浪人を集めて幕府への反乱を企てた。その目的は、天下を乱すことではなく、浪人救済を訴えて天下の政道を改めることであった。しかし、密告により計画が幕府に露見し、正雪は駿府梅屋町で奉行衆に取り囲まれて自刃した。

・正雪の計画は失敗に終わったものの、それが幕府に与えた衝撃は大きかった。事件後、幕府は改易の法を緩和し、浪人の登用を諸藩に奨励するなど、（武断政治から）いわゆる「文治政治」へと移行していったのであった。

Ⅳ．竹千代（家康の幼名）の駿府での人質生活は？

・家康は、松平広忠の子として岡崎城で誕生した。幼名は「竹千代」。母は「於大（おだい）」と言い、その父は三河国の武将水野忠政であった。松平氏はまだ三河の国衆にすぎなかった。当初、水野氏と松平氏は婚姻を通して協力する関係にあった。しかし、天文１２年に忠政が没すると跡を継いだ子の信元は、織田方へと急接近することとなった。今川方に止まった松平氏にとっては、もはや水野氏と同盟関係を保つことが出来なくなったのである。

・同盟関係の破綻は、そのまま婚姻関係の解消につながる。広忠は於大と離婚し、国元へ返したのである。こうした事情から家康はわずか６歳で今川氏の人質として駿府に送られることとなった。しかしその途中で味方であった三河国田原城主戸田康光の裏切りにより身元を奪われ、尾張国の織田氏のもとへ送られた。

・天文１８年に家康の父広忠が没すると、盟友の今川義元は岡崎城を自らの管理下に置いた。やがて、家康は人質交換によって織田家から今川氏の本拠地である駿府に移り、１９歳まで「三河の小せがれ」と罵られ同地で過ごすことになる。

・１４歳で元服すると、今川義元の一字を与えられて「元信」と名乗り、その二年後には今川氏縁者の「築山殿」と婚姻している。こうした家康に対する扱いは、厳しかったとも言われているが、比較的手厚　いものがあったと考えられる。駿府での人質生活は、家康の人格を形成したと言っても過言ではない。

Ⅴ．岡崎の特産品「八丁味噌」の起源は？

・八丁味噌は、大豆のみを原料とする豆味噌である。色は赤褐色で味は辛口。熟成には二冬二夏の長い期間を要し、甘味が少なく独特の渋みがあり、うまみが多いのも大きな特徴である。この八丁味噌は質素倹約を旨とした徳川家康の大好物であった。

・なぜ、八丁味噌と呼ばれたのか？そのルーツをたどると、岡崎城にほど近い「八丁村」で盛んに作られてきたと言われている。八丁村は、岡崎城から西へ八町（約８７０メートル）離れていたので、その名称がついたという。この八丁味噌は戦争中の兵糧としても珍重された。

Ⅵ．「静岡」という県名はどこから来たの？

・現在の静岡県は幕末の「府中藩」である。徳川幕府十五代将軍を務めた徳川慶喜は新政府によって「朝敵」の汚名を着せられ、出身地の水戸で謹慎したのち、死罪となるところを罪一等を減じられ駿府へと　送られた。徳川家は田安亀之助に相続が許され、亀之助は「家達（いえさと）」と名を改め、府中藩主七十万石に封ぜられた。

・藩の成立に上記のような事情があったので、徳川家は事あるごとに政府の顔色をうかがわざるを得ず、「府中藩」の名が“不忠”に通じるとして徳川家の内部から改名の提案がされたのも、政府をはばかってのことであった。

・新たな藩名の候補に挙がったのは「静（しず）」「静城（しずき）」「賤ヶ丘（しずがおか）」の３つ。このうち「賤ヶ丘」は駿府城の北に位置する「賤機山」にちなんだものであったが、府中学問所で学頭を務めていた「向山黄村（むこうやまこうそん）」がこの案に異を唱えた。「賤」の字が「いやしい」という意味を持つことから、この文字の使用を嫌ったものである。

・黄村は、旧幕臣で外国奉行も務めた人物で駐仏公使も務めた。彼の提案で「賤」は「静」に、「丘」は「岡」に改められ、明治２年６月に政府の命を受けて府中藩は「静岡藩」に改称され、この名が明治４年の廃藩置県の際にも受け継がれ「静岡県」が誕生したのである。

徳川家康年表

年　号　(西暦)	内　容
天文11年(1542)	12月26日午前4時ごろ　家康(幼名、竹千代)岡崎城に生まれる。
天文16年(1547)	竹千代(家康)、人質として駿府に赴く途次、田原戸田氏に奪われ、尾張織田氏のもとに送られる。
天文18年(1549)	家康の父、松平広忠没。 今川勢、織田方の安城城を陥落させ、城将織田信広を生け捕りに、竹千代との人質交換に成功。竹千代は駿府に送られる。
弘治元年(1555)	竹千代、元服して次郎三郎元信となのる。
弘治3年(1557)	元信、関口義広女(築山殿)と結婚。(前年説あり)
永禄元年(1558)	元信、前年よりこの年のあいだに元康と改名する。 元康、今川義元の命で寺部城の鈴木重辰を攻める(家康の初陣である)。
永禄3年(1560)	義元、元康に大高城兵糧入れを命じる。 今川義元が桶狭間の戦いで織田信長に討たれ戦死したため、岡崎城にもどり、三河平定に着手する。
永禄4年(1561)	元康、今川方の中島城主板倉重定のほか、西尾城(西条城)の牧野氏、東条城の吉良義昭を攻める。 西尾城攻略に手柄のあった酒井政家に同城が与えられる。 元康、父広忠茶毘の地能見に松応寺を建立。
永禄5年(1562)	元康、清洲城で織田信長と会見、三尾同明を結ぶ。 元康、西郡上ノ郷城の鵜殿長照を攻める。 元康、清康・於久菩提のために随念寺建立。
永禄6年(1563)	元康、家康と改名。 三河一向一揆がおこる。

永禄7年(1564)	家康、一向一揆を鎮圧し、東三河平定の戦いを再開する。
永禄8年(1565)	家康、今川家臣の守る吉田城、ついで田原城を開城する。
永禄9年(1566)	家康、松平から徳川へ改姓し、従五位下、三河守の叙位・任官を受ける。
永禄11年(1568)	家康、遠江へ進出を開始する。
永禄12年(1569)	掛川城開城、今川氏滅ぶ。
元亀元年(1570)	家康、居城を浜松に移し、岡崎城を信康に譲る。 家康、武田信玄と断交し、上杉謙信と同盟を結ぶ。
元亀2年(1571)	武田勢、三河に侵入し、足助城などを陥落させる。
元亀3年(1572)	岡崎町奉行大岡弥四郎、武田氏への通謀が発覚し、処刑される。 家康、武田信玄と三方原の戦い、大敗する。
天正元年(1573)	武田信玄没。
天正3年(1575)	織田・徳川連合軍、武田勝頼を設楽原に破る(長篠の戦い)。
天正7年(1579)	家康、正室の築山殿を殺害し、信康を切腹させる.。
天正9年(1581)	家康、武田方の遠江高天神城を攻め落とす。
天正10年(1582)	家康、織田信長とともに甲斐に攻め入り、武田氏を滅ぼす。 本能寺の変で信長死去。 家康、堺より急遽岡崎に帰る(伊賀越えの危機)。 家康、甲斐・信濃経略に乗り出す。
天正11年(1583)	家康、本能寺門徒・道場の再興を許可する旨を妙春尼に伝える。

天正12年(1584)	家康、尾張小牧山に陣して豊臣秀吉と戦い、また、岡崎城を攻略しようとした豊臣軍を長久手で破る。
天正14年(1586)	家康と秀吉の和議成立。 家康、秀吉の異父妹である朝日姫と結婚。 秀吉実母の大政所、岡崎に下向し、家康上洛する。 家康、居城を駿府城に移す。
天正16年(1588)	家康、京都屋敷造営のための木材調進を三河本願寺門徒に命ずる。
天正17年(1589)	家康領国の5か国に検地が行なわれ、郷村に家康の7か条定書が出される。
天正18年(1590)	秀吉、小田原の北条攻めを行い、家康先鋒役を命じられる。 家康、秀吉により関東に移封され、田中吉政岡崎城主となる。
文禄元年(1592)	文禄の役。 家康、肥前名護屋に滞陣し、秀吉の本営を固める。
慶長元年(1596)	家康、権大納言従二位から内大臣正二位に昇進。
慶長3年(1598)	秀吉死去。
慶長4年(1599)	家康、伏見城西の丸に入り、ついで、大阪城西の丸に移る。
慶長5年(1600)	家康、関ヶ原で石田三成軍を破る(関ヶ原の戦い)。
慶長8年(1603)	家康、征夷大将軍に任じられ、江戸幕府を開く。
慶長10年(1605)	家康、将軍職を秀忠に譲る。
慶長12年(1607)	家康、江戸城より駿府城に移る。
慶長15年(1610)	家康、名古屋城の築城工事に着手。
慶長19年(1614)	家康、大坂城の豊臣秀頼を攻める(大坂冬の陣)。
元和元年(1615)	家康、大阪城を落城させ、豊臣氏を滅ぼす(大坂夏の陣)。 「武家諸法度」および「禁中並公家諸法度」公布される。
元和2年(1616)	家康、太政大臣に任じられる。 家康、4月17日に駿府城にて死去、久能山に葬られる。
元和3年(1617)	家康、東照大権現の神号をうけ、日光山に改葬される。

安祥城

ここ、安城には名前の通り、松平家と縁のある安祥城という城がありました。今は、城跡を残すだけとなっていますので、今回は行きませんが、実は家康が、織田家の人質から解放されるきっかけを作った城でもあります。

①天文16年（1547年）、織田氏の討伐軍が岡崎城を侵攻し、それに耐えることが出来ないと考えた松平広忠は、やむなく今川氏に救援を求めます。これに対し、今川氏の当主・今川義元は人質として、竹千代（徳川家康）を引き渡すことを要求します。広忠はこれを受諾し、竹千代を駿府に送りますが途中で拉致され尾張の織田氏に売られてしまいます。

②弘忠死後、今川義元は松平領押領を完成させるため、太原雪斎を将として三河に出陣し織田信広（信長の兄）が守る安祥城を落とし、織田信広を捕縛します。

③織田信広が今川の人質となったことにより、竹千代との人質交換により、竹千代は晴れて（一旦）岡崎城に帰還することができたということです。

歴史

永享12年（1440年）、三河国碧海群周辺を支配していた和田氏（畠山氏の一族と言われる）の和田親平が築城したとされます。その後文明3年（1471年）、三河国岩津城主の松平信光が城の近くで祭りがあるとうわさをたたせ、それを知った城の者はみな祭りだと興奮し祭りに行ってしまったすきに無血落城させということです。以後4代、松平氏の居城となります。大永4年（1524年）、4代目の松平清康は、岡崎城を取得するも、なお安祥を本拠とし、逝去するまで、徳川本家の本拠地となり、徳川本家の本城が岡崎城になるのは、松平広忠の時代からです。

太原雪斎

①今川家の軍師
②今川義元・徳川家康の教育係
③臨済宗の僧侶

山本勘助:「今川家の事、悉皆坊主(雪斎)なくてはならぬ家」

家康:「義元は雪斎和尚とのみ議して国政を執り行ひし故、家老の威権軽ろし。故に雪斎亡き後は、国政整はざりき」

今川義元の右腕として手腕を発揮し、今川氏の発展に大きく寄与したことから「黒衣の宰相」「名補佐役」「軍師」などと現在では評価されており、今川家の全盛期を築いた人物と言われています。
雪斎が病死した後5年後に今川義元は桶狭間にて命を落とすが、雪斎がいれば、桶狭間で交戦することはなかったかもしれませんね。

今川家人質時代、竹千代は軍学を学びたいと義元へ訴え、義元は雪斎を竹千代の教育係に任命し6年間竹千代に教育を施します。ただ、最近の研究では、竹千代が人質生活を送ったのは豊橋だとする説もあり、そうするとこの教育係の説は怪しいとも言われています。

＜雪斎と家康のドラマ＞
・1983年　NHK大河ドラマ　徳川家康
(雪斎役は小林桂樹)
・1988年　NHK大河ドラマ　武田信玄
・2007年　NHK大河ドラマ　風林火山

＜余談＞
雪斎に対抗して、勘助も晩年頭を剃って坊主になっています。勘助の剃髪を見た武田晴信は、自分も勘助や雪斎のように頭を剃れば軍師並の知能を会得出来るに違いないと根拠のない思い込みをして出家して信玄と号しました。つまり信玄の生みの親は雪斎ということになります。

家康生誕の城：岡崎城

家康は松平広忠・於大の方の跡取りとして天文11年（1542年）岡崎城で産声をあげました。
一寸地味なお城ではありますが、家康の生涯を辿るには省くことが出来ないお城です。

江戸時代、岡崎城は「神君出生の城」として神聖視され、本多氏（康重系統）、水野氏、松平（松井）氏、本多氏（忠勝系統）と、家格の高い譜代大名が城主となりました。石高こそ5万石前後と少なかったですが、大名は岡崎城主となることを誇りとしたと伝えられます。

―見所―
①家康産湯の井戸
②えな（胞衣：胎盤）塚
③船着き場（五万石でもお城下まで船が着く）
④各種の堀

天文11年（1542）12月26日、徳川家康は、ここ岡崎城内で誕生しました。家康は、6歳で織田信秀（信長の父）、8歳で今川義元の人質となり、少年期を他国で過ごしましたが、永禄3年（1560）の桶狭間の合戦で、今川義元が戦死したことを契機に自立しました。ときに19歳。以来、岡崎城を拠点（（浜松城に移るまで11年間在城）に天下統一という偉業への基礎を固めることになります。
元亀元年（1570）、家康は本拠を遠江浜松（静岡県浜松）に移し、嫡男信康を岡崎城主としました。天正7年（1579）に信康が自刃したあとは、重臣の石川数正、ついで本多重次を城代としました。天正18年（1590）に家康が秀吉によって関東に移されると、秀吉の家臣田中吉政が城主となりますが、家康が江戸に幕府を開いてからは、譜代大名にここを守らせました。

①

②

③

④

岡崎公園案内図
N
国道1号線
大手門
至・豊橋
三河武士のやかた家康館
二の丸
二の丸総合堂
本多平八郎忠勝像
カラクリ時計
徳川家康公銅像
産湯の井戸
坂谷橋
伊賀川
坂谷門跡
清海堀
巽閣
えなり塚
天守
本丸
アラモの碑
能城神社
能城堀
神橋
竹千代橋
竹千代通り
舟着場跡
乙川
五万石橋

徳川代々の祈願所：伊賀八幡宮

伊賀八幡宮は文明二年（1470年）、松平四代親忠が松平家（徳川将軍家の祖）の氏神として家運長久、子孫繁栄を祈願する為、三重県の伊賀国から三州額田郡井田村へ社を移したのが始まりといわれています。

最初の社殿は焼失していて、現在ある伊賀八幡宮の社殿は三代将軍家光が寛永十三年（1636年）に造営したものです。
社殿は権現造りで、本殿、拝殿、弊殿、御供所、随身門、神橋、鳥居などが国の重要文化財に指定されてる貴重な神社です。
ほぼ見るものすべてが重要文化財です。

①八代広忠公は、天文4年十二月織田信秀が岡崎城を攻め取ろうとしたとき、八幡宮に祈願して井田ヶ原に迎え撃ちました。
そのとき先頭に馬に乗った武者が現れ敵陣めがけて白羽の矢を放った。すると八幡宮の森の上から黒雲が沸き嵐を呼んで、白羽の神矢が雨あられのように敵陣へ飛びました。たちまち、三万あまりの敵兵は敗退したとのことです。

②桶狭間の戦いに利なく軍を引かそうとしたとき矢作川に八幡宮の神の使いの鹿が現れて、家康公は無事大樹寺に入ることができたとのことです。

家康＝大権現のいわれ
伊賀八幡宮の大神様が、家康公に化身してこの世に出現（＝権現）といういわれによります。

＜権現造り＞
権現造りは石の間造りとも呼ばれ、まず左右に長い本殿を置き、その前に拝殿を配し、その間を「石の間」で繋いだもので、上から見ると「エ」の字型になります。

松平徳川家総氏神 伊賀八幡宮鳥瞰図
御供所
日吉社
拝殿
熊殿
本殿
伊勢社
若宮社
透塀
上総社
受付
神馬
神橋
石鳥居
安芸社

合気道奉納

伊賀八幡宮の重要文化財 ①

本殿

慶長16年（1611）徳川家康公によって造営されました。権現造りの本殿は入母屋造が普通ですが、伊賀八幡宮は流造りになっている珍しい建物です。（国の重要文化財）
「本殿」「幣殿」「拝殿」の三連で権現造りとなっています。

幣殿・拝殿

寛永13年（1636）三代将軍家光公によって本殿に増設し、造営されました。
なお同じ年に日光東照宮も改築完工されています。（国の重要文化財）

透塀

本殿と幣殿を囲んでおり、一定の間隔で並んだ格子の隙間から本殿と幣殿を見ることができます。透塀も桧皮葺の屋根となっています。（国の重要文化財）

伊賀八幡宮の重要文化財 ②

御供所

神様のお供物を調整したり、物を置いたりして、使用しました。
社殿以外の建造物で古いものが残っているのは伊賀八幡宮を含め数社だけです。（国の重要文化財）

随神門

神域の守り神、**随神様**（市の指定文化財）が門の両側に配置されております。
随神様が安置する随神門は愛知県では伊賀八幡宮だけです。
また門の表と裏両方の左右に力神が門の屋根を支えています。（国の重要文化財）

石鳥居

明神鳥居で、神社を構成する建造物として価値があります。
（国の重要文化財）

伊賀八幡宮の重要文化財 ③

神橋（石橋）

蓮池にかかる石橋です。
寛永13年境内が整備された際、架けられました。
幕府作事方御大工鈴木長次（スズキナガツグ）が木橋の工法を取り入れて造りました。（国の重要文化財）

牟久津社

大奈持之命をお祀りする。伊賀八幡宮神城の守護のいわゆる大国様。
寛永13年の建立といわれています。
（市の指定文化財）

さざれ石

国歌『君が代』にうたわれた石です。
大小様々な石が集まって固まり苔のむすまで・・・。皇室の御代を永遠にという願いと、国民の同胞意識を込めた石です。

設楽原古戦場（長篠の戦）

信長鉄砲3000丁3段打ち？で有名な古戦場です。
また、武田家滅亡の遠因ともなった戦いです。
家康は織田・徳川連合軍として参戦しました。

合戦中継

天正三年四月五日、武田勝頼は一万五千の軍勢を率いて甲府を出馬し、兵わずかに五百人の奥平貞昌が守る長篠城を包囲した。武田軍の猛烈な攻撃により落城を目前にし、救援の使者鳥居強右衛門は強固な包囲網を破り、岡崎に走り使命を果たした後、城に戻ろうとして捕らえられ磔になった。

これに対し織田・徳川連合軍は、三万八千の大軍を設楽原へ繰り出し、馬防柵を拵らえ、専ら防戦の構えを見せたため、武田軍は長篠城包囲軍三千の兵を残し、主力は寒狭川を渡り設楽原へ進攻した。

設楽原は連吾川に沿った帯状の湿地があり、梅雨で一層ぬかるみとなっていた。この地を挟み東に武田軍、西に連合軍が対峙した。武田軍は天下に誇る伝統の騎馬軍団、連合軍は自慢の鉄砲三千挺を最前線に配備し両軍は開戦の態勢を整えた。時まさに天正三年（西暦一五七五年）五月二十一日(太陽暦七月九日)であった。

朝霧立ち込める午前六時頃、鳶ケ巣山奇襲を合図に静寂を破る武田軍の鬨の声と、迎え撃つ連合軍の轟然たる銃声で戦端がきられた。武田軍は先ず馬防柵の突破口を探り、左翼隊は勝楽寺前で徳川軍に、右翼隊は丸山砦で織田軍に突撃した。ついで中央隊が加わり攻防が繰り返される中、八剣前では遂に柵を突破した。しかし、果敢に攻撃して緒戦優位を保った武田軍も、間断なく飛び来る銃弾で、数々の名将と兵馬を失い、八時間に及ぶ交戦の末遂に敗れ去った。

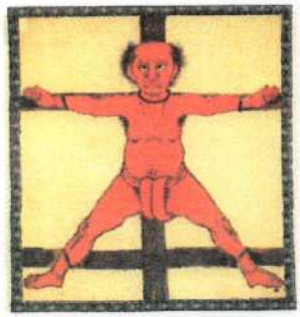
この戦いで、武田軍の戦死者は一万余人、連合軍の死傷者も六千人を下らなかったという。

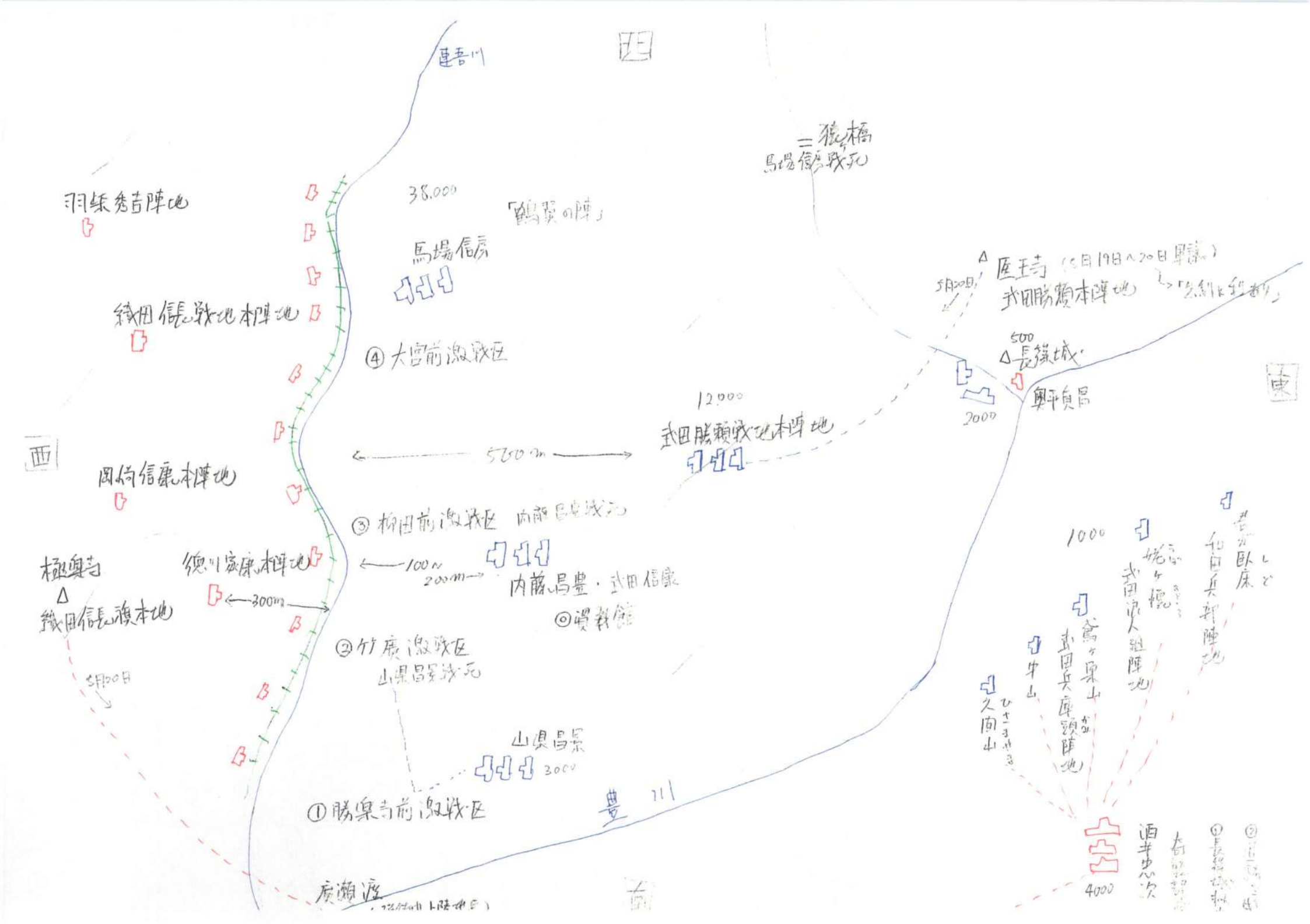
長篠城を守った奥平貞昌と英雄鳥居強右衛門

長篠城攻防戦

武田の大軍に対して500の寡兵に過ぎなかった長篠城ではあるが、200丁の鉄砲や大鉄砲を有しており、また周囲を谷川に囲まれた地形のおかげで武田軍の激しい攻撃にも何とか持ちこたえ善戦していた。しかし兵糧蔵の焼失により食料を失い、このままでは数日以内に落城必至という状況に追い詰められた。そのため5月14日の夜、貞昌の家臣の一人である鳥居強右衛門を密かに派遣し、約65km離れた岡崎城の家康へ援軍を要請させた。一方、信長はすでに5月13日には30,000の軍勢を率いて岐阜を出発しており、15日には岡崎城に到着して、家康の軍勢8,000と共に長篠城へ援軍を送るための準備を進めていた。
夜の闇に紛れて武田軍の厳重な包囲網を突破し、5月15日の午後に岡崎城にたどり着いた鳥居は、信長および家康との面会を果たし、翌日にも援軍が長篠城へ向けて出発する予定であることを知らされた。鳥居はこの朗報を一刻も早く長篠城に伝えようと急いで引き返したが、城の目前まで来たところで武田軍に見付かって捕らえられてしまった。鳥居は武田方から「援軍は来ない。あきらめて早く城を明け渡せ」と偽りの情報を城に伝えれば助命するとの取引を持ちかけられ、表向きはこれを承諾した。しかし、城の近くまで連れて来られた鳥居は、城に向かって「あと二、三日で援軍が来る。それまで頑張れ」と大声で叫んだため、怒った武田軍に殺された。一方、鳥居の決死の行動によって「援軍来る」の情報を得ることができた長篠城の城兵たちは、鳥居の死を無駄にしてはならないと大いに奮い立ち、援軍が到着するまで見事に城を守り通すことができた、という逸話が残っている。

武田家の家臣・落合左平次道久が、強右衛門の忠義心に感動し、磔にされている強右衛門の姿を絵に残して、これを旗指物として使ったといいます。これを描き直した物が現存しています。




北
東
西
南
建吾川
豊川
羽柴秀吉陣地
38,000
「鶴翼の陣」
馬場信房
織田信長戦地本陣地
④大宮前激戦区
二猿橋
馬場信房戦死
医王寺
武田勝頼本陣地
5月20日
500
長篠城
奥平貞昌
2000
12,000
武田勝頼戦地本陣地
500m
岡崎信康本陣地
③柳田前激戦区
内藤昌豊戦死
100m
200m
内藤昌豊・武田信豊
◎設楽原
極楽寺
織田信長後本陣
徳川家康本陣地
300m
②竹廣激戦区
山県昌景戦死
5月20日
山県昌景
3000
①勝頼寺前激戦区
廣瀬渡
1000
武田兵部陣地
武田兵庫頭陣地
中山
久間山
酒井忠次
4000

三方原古戦場

しかみ像

合戦 ジオラマ

三方原古戦場 石碑

「三方ヶ原の戦い（みかたがはらのたたかい）」は、元亀3年12月22日（1573年1月25日）に、遠江国敷知郡の三方原（現在の静岡県浜松市北区三方原町近辺）で起こった、武田信玄軍2万7,000～4万3,000人と徳川家康、織田信長からの連合軍1万1,000～2万8,000人との間で行われた戦い。信玄の西上作戦の過程で行われた戦いであり、家康が大敗したことで有名な戦である。

戦国期に甲斐国は信濃侵攻を行い領国を拡大し越後の上杉氏と対決していたが、永禄4年の川中島の戦いを契機に方針を転換し、それまで同盟国であった駿河国の今川領国への侵攻を開始する（駿河侵攻）。また、桶狭間の戦い（1560年5月）において今川氏当主の義元が尾張国の織田信長に討ち取られると、今川氏に臣従していた三河国の松平元康（徳川家康）は三河において織田氏と同盟関係を結び独立した。

駿河侵攻により武田氏は駿河において三河の徳川氏や今川氏の同盟国であった相模国の北条氏に挟撃される形となる。やがて武田氏は北条氏を退けて今川領国を確保し、徳川領国である三河・遠江方面への侵攻を開始する。武田氏の侵攻に対して徳川氏は同盟関係にある織田氏の後援を受け、東海地域においては武田氏と織田・徳川勢の対決が推移する。

元亀元年（1571年）、室町幕府15代将軍・足利義昭は織田信長討伐令を出し（第二次信長包囲網）、それに応える形で信玄は翌元亀2年に徳川領国である遠江国・三河国に大規模な侵攻を行う（ただし、武田氏と織田氏は同盟関係は維持していたため、当初織田氏は徳川氏に援軍を送らなかった。）。同年末には北条氏康の死をきっかけに北条氏は武田氏と和睦して甲相同盟が復活し、後顧の憂いを絶った信玄は、翌元亀3年に西上作戦を開始する。

元亀3年（1573年）、武田軍は兵を3つに分けて、遠江国・三河国・美濃国に同時侵攻を行う。
山県昌景軍5,000人。9月29日、信濃国・諏訪より東三河に侵攻、徳川氏の支城・武節城の攻略を初めとして南進。東三河の重要な支城である長篠城を攻略した後、遠江国に侵攻。
秋山虎繁（信友）軍5,000人。山県隊とほぼ同時に居城・高遠城より東美濃に侵攻、織田氏の主要拠点・岩村城を包囲（事実上の織田氏との同盟破棄）。11月初旬に攻略。
武田信玄率いる本隊2万2,000人（うち北条氏の援軍2,000人）。10月3日、甲府より出陣し、山県隊と同じく諏訪へ迂回した後、青崩峠から遠江国に侵攻。途中、犬居城で馬場信春隊5,000人を別働隊として西の只来城に向かわせて別れ、南進して要所・二俣城へ向かう。

総計3万人の軍勢は、当時の武田氏の最大動員兵力であり、まさに総力戦であった。この侵攻は武田軍の強さを証明するかのように凄まじく、本来小さな支城1つ落とすのにも1ヶ月近くかかるところを、平均3日で次々と落としていった。一方の徳川氏の最大動員兵力は1万5,000人に過ぎず、しかも三河国に山県隊が侵攻していたため、遠江国防衛のためには実際には8,000人余しか動員できなかった。さらに盟友の織田氏は、いわゆる信長包囲網に参加した近畿の各勢力と戦っていた。

10月13日に只来城を落とした馬場信春隊はその後、徳川氏の本城・浜松城と支城・掛川城・高天神城を結ぶ要所・二俣城を包囲し、信玄率いる武田軍本隊も二俣城に向かっていた。10月14日、二俣城を取られることを避けたい家康がひとまず武田軍の動向を探るために威力偵察に出たが、武田軍本隊と遭遇し一言坂で敗走する(一言坂の戦い)。

10月16日には武田軍本隊も包囲に加わり、降伏勧告を行う。二俣城は1,200人の兵力しか無かったがこれを拒否したため、10月18日から武田軍の攻撃が開始される。11月初旬に山県昌景隊も包囲に加わり、そして城の水の手を絶たれたことが致命的となって、12月19日、助命を条件に開城・降伏した(二俣城の戦い)。これにより、遠江国の北部が武田領となっていた。

当初、徳川家康と佐久間信盛は、武田軍の次の狙いは本城・浜松城であると考え、籠城戦に備えていた。一方の武田軍は、二俣城攻略から3日後の12月22日に二俣城を発すると、遠州平野内を西進する。浜名湖に突き出た庄内半島の先端に位置する堀江城（現在の浜松市西区舘山寺町）を標的とするような進軍であり、浜松城を素通りして三方原台地を通過しようとしていた。

これを知った家康は、一部家臣の反対を押し切って、籠城策を三方原から祝田の坂を下る武田軍を背後から襲う積極攻撃策に変更し、浜松城から追撃に出た。同日夕刻には、三方原台地に到着するが、武田軍は魚鱗の陣を布いて待ち構えており、徳川軍は鶴翼の陣をとって戦闘が始まる。

しかし、武田軍に対し兵力・戦術面ともに劣る徳川軍に勝ち目はなく、わずか2時間の戦闘で甚大な被害を受けて敗走する。
武田軍の死傷者200人に対し、徳川軍は死傷者2,000人のほか、鳥居四郎左衛門、成瀬藤蔵、本多忠真といった有力な家臣を始め、先の二俣城の戦いでの恥辱を晴らそうとした中根正照、青木貞治や、家康の身代わりとなった夏目吉信、鈴木久三郎といった家臣、また織田軍の平手汎秀といった武将を失った。このように野戦に持ち込んだことを含めて、全て武田軍の狙い通りに進んだと言えるが、戦闘開始時刻が遅かったことや本多忠勝などが、武田軍相手に奮戦したこともあり、家康を討ち取ることはできなかった。

浜松城に戻った家康は、苦渋の表情の肖像画を描かせ、これが現在、徳川家康三方原戦役画像、通称「顰（しかみ）像」として残っている。これは一般に、血気にはやって武田軍の誘いに乗り、多くの将兵を失った自分に対する戒めとして描かせたとして知られ、この後に熱くなった自分を抑えるために絵を見て自重していたという逸話が残っている。軍略の重要性を自らに確認させていたとも言われる。また有名な俗説に、この戦いにおける武田軍の戦略をそのまま後の関ヶ原の戦いで用いて、大垣城に籠城する西軍を野戦に誘き出したというものがある。

犀ヶ崖古戦場

「三方ヶ原の戦い」での徳川軍の一方的な敗北の中、家康も討ち死に寸前まで追い詰められ、夏目吉信や鈴木久三郎を身代わりにして、成瀬吉右衛門、日下部兵右衛門、小栗忠蔵、島田治兵衛といった僅かな供回りのみで浜松城へ逃げ帰った。この敗走は後の伊賀越えと並んで人生最大の危機とも言われる。

浜松城へ到着した家康は、全ての城門を開いて篝火を焚きいわゆる空城の計を行う。そして絵師を呼んで「顰（しかみ）像」を描かせると、湯漬けを食べてそのままいびきを掻いて眠り込んだと言われる。

この心の余裕を取り戻した家康の姿を見て将兵は皆安堵したとされる。浜松城まで追撃してきた山県昌景隊は、空城の計によって警戒心を煽られ城内に突入することを躊躇し、そのまま引き上げる。

同夜、一矢報いようと考えた家康は大久保忠世、天野康景らに命令し、浜松城の北方約1キロにある犀ヶ崖付近に野営中の武田軍を夜襲させる(犀ヶ崖の戦い)。

この時、混乱した武田軍の一部の兵が犀ヶ崖の絶壁から転落したり、崖に誘き寄せるために徳川軍が崖に布を張って橋に見せかけ、これを誤認した武田勢が殺到して崖下に転落したなどの策を講じ、その結果、多数の死傷者を出したという。

ただし、「犀ヶ崖の戦い」は徳川幕府によって編纂された史料が初出である。「幅100mの崖に短時間で布を渡した」、「十数丁の鉄砲と100人の兵で歴戦の武田勢3万を狼狽させた」、「武田勢は谷風になびく布を橋と誤認した」という、荒唐無稽な逸話である。また、戦死者数も書籍がどちらの側に立っているかによって差があり、『織田軍記』では徳川勢535人、甲州勢409人と互角に近い数字になっている。

犀ヶ崖の戦いの後、犀ヶ崖の底から転落死した武田兵の霊のうめき声が聞こえて来るようになり人々が恐ろしがった。そこで家康は僧侶の宗円を招き武田兵の霊を弔うための供養を行い、それ以後うめき声は聞こえなくなった。この供養が「遠州大念仏」の起源であるという。また、犀ヶ崖の戦いがあったとされる場所は、その伝承によって「布橋」と言う地名になった。浜松には「布橋の雪」という銘菓がある。

浜松城

浜松城天守

浜松城全景図(古図)

浜松城（はままつじょう）は静岡県浜松市中区にある日本の城跡。「野面(のずら)積みの石垣」で有名。歴代城主の多くが後に江戸幕府の重役に出世したことから「出世城」といわれた。

浜松城の前は曳馬（ひくま）城（引馬城、引間城）がこの浜松の拠点だった。築城者については諸説あるが、瀬名姫の先祖である今川貞相が初めて築城したという。

斯波氏と今川氏が抗争すると、この地を支配していた大河内貞綱は斯波氏に味方するが今川氏に敗れた。その後は今川氏親の配下・飯尾氏がこの地を支配することになる。永正11年（1514年）、飯尾乗連（またはその父飯尾賢連）が城主になったともいわれる。乗連は今川氏に引き続き仕え、桶狭間の戦いにも参加した。桶狭間の戦いにおいて今川義元が戦死すると今川氏の衰退が始まるが、この時期に飯尾氏の当主も乗連から子の連竜へと移り変わる。

今川氏の衰退後、城主飯尾連竜が今川氏真に反旗の疑惑をもたれ、永禄8年（1565年）に今川軍に攻囲され多大な損害を被るが、陥落は免れた。この時今川からの和議勧告を受諾した連竜は、戦後に今川氏再属のため駿府への大赦御礼に出向いたが、和議は謀略で、連竜は殺された。以後の曳馬城は、連竜の家老の江間氏によって守られるも城内は徳川派と武田派に分裂して内紛が起きていたため徳川家康によって早期攻略された。また一説ではその後連竜の未亡人・お田鶴の方を中心とした飯尾氏の残党によって守られるが家康が永禄11年（1568年）12月にお田鶴の方に使者を送り城を渡せば妻子共々面倒を見ると降伏を促すもお田鶴の方が拒否し続けたため、家康が兵を使って攻め込み、お田鶴の方が城兵を指揮して奮戦したが侍女と共に討死にした。またそのお田鶴の方を祀った「椿姫観音」が城の近くに残っている。

元亀元年（1570年）に家康は武田信玄の侵攻に備えるため本拠地を三河国岡崎から遠江国曳馬へ移した。岡崎城は嫡男・信康に譲られた。当初は天竜川を渡った見付（磐田市）に新たに築城をするつもりであったが、籠城戦に持ち込まれた際天竜川により「背水の陣」となることから、曳馬城を西南方向に拡張した。その際、曳馬という名称が「馬を引く」、つまり敗北につながり縁起が悪いことから、かつてこの地にあった荘園（浜松荘）に因んで城名・地名ともども「浜松」と改めた。

元亀3年（1573年）、武田信玄がこの城を攻める素振りを見せながらこれを無視するような行軍をして家康を挑発。挑発された家康は浜松城から打って出たが、武田軍の巧妙な反撃に遭って敗北を喫した（三方ヶ原の戦い）。

城の拡張・改修は天正10年（1582年）ごろに大体終わったが、その4年後の天正14年（1586年）、家康は浜松から駿府に本拠を移した。家康の在城期間は29歳から45歳までの17年間になる。

家康以後、天正18年（1590年）からは秀吉の家臣堀尾吉晴と、その次男堀尾忠氏が合わせて11年間在城したが、関ヶ原の戦いの功績で出雲国富田に移封。以後は、一時徳川頼宣の領地だった時期を除いて、譜代大名各家が次々に入った。近世には天守は存在しなかったようで絵図にも記載がない。本丸にあった二重櫓が天守代用とされていた。

浜松城は明治維新後に廃城となり破壊された。城址は1950年に「浜松城公園」となり、1958年に鉄筋コンクリート製の復興天守が再建された。1959年には浜松市の史跡として指定された。 現在の天守閣は資料館として使われており、家康を初めとした当時のゆかりの品々を見学できるほか、城の周辺は緑が溢れ、桜の名所としても名高く、シーズンには花見客で溢れ返る。

もともと曳馬城だった部分には、江戸時代には米蔵などが置かれていたが、明治維新後の1894年に井上延陵によって東照宮が創建され、太平洋戦争中の1945年焼失したが1959年に再建されて現在に至る。

浜松東照宮（曳馬城跡）

浜松東照宮拝殿

曳馬城跡石碑

浜松城のある一帯にはもともと曳馬城と呼ばれる城があった。現在この地には徳川家康を祀る浜松東照宮が建てられている。

1568年（永禄11年）に今川方の拠点であった曳馬城を攻め落とした徳川家康は「馬を引く」という名前は負け戦を意味するため縁起が悪いということで、地名を「浜松」にあらためて、さらに城を大幅に拡大して浜松城を築いた。曳馬城の跡には米蔵十数棟が建てられたといわれている。

この東照宮は、1886年（明治19年）に旧幕臣井上延陵の発起によって創建された。

御祭神　徳川家康　事代主命　大国主命

昭和20年戦災により焼失したが、昭和34年に社殿・手水舎・社務所等を再建した。徳川家康を祭神としているため、社殿の扉や屋根には三つ葉葵の紋所が見られる。

静岡浅間神社（おせんげんさま）

神戸神社・浅間神社大拝殿、舞殿

大歳御祖神社拝殿

「静岡浅間（せんげん）神社」は、静岡県静岡市葵区にある神社。神部神社・浅間神社・大歳御祖神社の三社からなり、「静岡浅間神社」は総称。三社はいずれも独立の神社として祭祀が行われている。

静岡市街地に接する賤機山（しずはたやま）の麓に以下の三社が鎮座する。

［神部神社　（かんべじんじゃ）］

祭神：大己貴命　（おおなむちのみこと）　－ 駿河国開拓の祖神

崇神天皇の時代（約2100年前）の鎮座と伝えられる。延喜式内小社で祈年の国幣に預った。国府が定められてからは国司崇敬の神社となり、平安時代より駿河国の総社とされた。

［浅間神社　（あさまじんじゃ）］

祭神：木之花咲耶姫命　（このはなのさくやひめのみこと）

全国にある浅間神社の一社。延喜元年（901年）、醍醐天皇の勅願により富士山本宮浅間大社より総社神部神社の隣に勧請され、以来冨士新宮として崇敬されてきた。

［大歳御祖神社　（おおとしみおやじんじゃ）］

祭神：大歳御祖命（おおとしみおやのみこと）　－ 倉稲魂神・大年神の母神で、神大市比売命を指す

応神天皇の時代（約1700年前）の鎮座と伝えられ、元々は安倍川河畔の安倍の市（古代の市場）の守護神であった。古くは「奈古屋神社」と称された。延喜式内小社で祈年の国幣に預った。

●社殿は江戸時代後期を代表する漆塗極彩色が施された壮麗なもので、計26棟が国の重要文化財に指定されている。この社殿群は文化元年(1804年)より60年の歳月と約10万両の巨費を投じて建造されたもので、信州諏訪の立川和四郎ほか門弟により彫刻された花鳥霊獣類は繊細を極めている。特に、重層な大拝殿は高さ25メートルで木造神社建築としては、出雲大社本殿(約24メートル)より高く、まさに日本一の威容を誇る。

鎮座地の賤機山（しずはたやま）は、静岡の地名発祥の地として知られ、古代より神聖な神奈備山としてこの地方の人々の精神的支柱とされてきた。6世紀のこの地方の豪族の墳墓であるとされている賤機山古墳（国の史跡）も、当社の境内にある。また、静岡市内には秦氏の氏寺である建穂寺、秦久能建立と伝えられる久能寺など当社の別当寺とされる寺院があり、その秦氏の祖神を賤機山に祀ったのが当社の発祥であるともいわれている。

当地に鎮座して以来、当社へは朝廷をはじめ、鎌倉将軍家、今川、武田、織田、豊臣、徳川など各氏の尊崇厚く、宝物の寄進、社領の安堵などの事績は枚挙にいとまがない。ことに徳川家康は、幼少の頃今川氏の人質として当社の北方約1kmのところにある臨済寺に預けられていた頃から、生涯に渡って当社を篤く崇敬した。 まず1555年（弘治元年）、家康14歳の時、当社で元服式を行った。 そして1582年（天正10年）、三河・遠江の戦国大名となっていた家康は、賤機山に築かれていた武田氏の城塞を攻略するにあたり、無事攻略できたならば必ず壮麗な社殿を再建するとの誓いを立てたうえで当社の社殿を焼き払い、駿河領有後に現在の規模と同程度の社殿を建造した。 さらに家康が大御所として駿府在城時の1607年（慶長12年）には、天下泰平・五穀豊穣を祈願して、稚児舞楽（現、静岡県指定民俗文化財・4月5日奉奏）を奉納した。

以来当社は、徳川家康崇敬の神社として歴代将軍の祈願所となり、神職社僧の装束類も幕府から下行されるようになるなど徳川将軍家から手厚く庇護されるようになった。 例えば、江戸時代初期の駿府藩主・駿河大納言徳川忠長は、この賤機山で猿狩りを行い当社の神の使の猿を狩ったことで、兄である将軍・徳川家光の逆鱗に触れたことが知られている。 こうした経緯から、明治初年に至るまでの社領等の総石高は2313石にも及んでいた。

賤機山(しずはたやま)古墳　国史跡指定

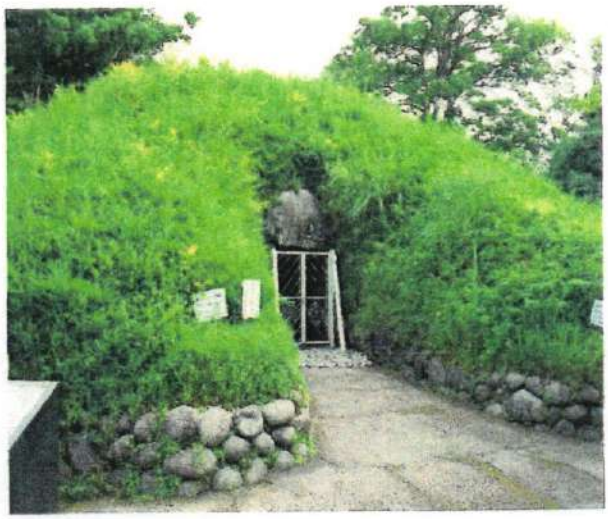
静岡市葵区宮ケ崎町の静岡浅間神社境内にある円墳。

墳丘は賤機山の南端の斜面を利用して造られており、直径は約32m・高さは約7mの円墳で、埋葬施設として横穴式石室を持ち内部に家形石棺が置かれている。 築造時期は6世紀後半とみられている。

石室用材は賤機山丘陵から安倍川下流右岸にかけて分布する玄武岩である。
石棺は家形石棺で長さ約2．9m・幅約1mで伊豆産の凝灰岩を刳りぬいて造られている。

近世後期に盗掘されたと見られ、駿河国の地誌『駿河国志』に明和年間(1764年ー1772年)のこととして、石室内や家形石棺の様子や太刀などについての所見が記されている。

1949年(昭和24年)に後藤守一、斎藤忠らにより発掘調査が行われ、盗掘を受けた石棺の周囲から金銅製の冠帽金具、土師器、須恵器、桂甲、馬具、武具、装身具類などが多数出土した。
これらの出土品は静岡市文化財資料館に展示されている。



墳丘と石室入り口

石室内部と家形石棺

墳丘前の模型

静岡市文化財資料館

「静岡市文化財資料館」は、当初は静岡浅間神社の宝物館として設立するため、氏子総代・崇敬会の寄付が集められた。その後静岡市の補助により、市民文化の向上及び文化財保護思想の普及を図ることを目的として市の施設として設立された。氏子総代・崇敬会を中心とする静岡市文化財協会が管理運営を行っている。

収蔵資料は静岡浅間神社の宝物を中心に、静岡市の収蔵資料、氏子・崇敬会からの寄託資料を収蔵している。その内容は賤機山古墳より出土した遺物、徳川家関係資料、静岡浅間神社関係資料、山田長政関係資料、今川氏関係資料、武田氏関係資料、朝鮮通信使関係資料など多岐にわたり、主な資料として県指定文化財の東海道図屏風・徳川家康着初腹巻がある。

展示は１階の一部と２階で行われている。主に収蔵展示を行っており、壁ケースとローケースを使っている。年に２～３回の企画展を行っており、一部外部から資料を借用展示している。

駿 府 城

巽櫓（復元）

東御門高麗門（復元）

駿府城は駿河国安倍郡、現在の静岡県静岡市葵区にあった城である。別名は府中城や静岡城など。徳川家康が大御所時代に居城にした。現在では、天守・櫓・門などの建造物や三重の堀のうち外堀の三分の一と内堀（本丸堀）は埋め立てられて現存していないが、残された中堀・外堀の石垣が往時の姿を留めている。

14世紀に室町幕府の駿河守護に任じられた今川氏によって、この地には今川館が築かれ今川領国支配の中心地となっていた。今川氏は隣接する甲斐国の武田氏、相模国の後北条氏と同盟を結び領国支配を行ったが、16世紀には甲斐を中心に領国拡大を行っていた武田氏との同盟関係が解消され、武田氏の駿河侵攻により今川氏は駆逐され、城館は失われた。

今川領国が武田領国化されると支配拠点のひとつとなるが、武田氏は1582年（天正10年）に織田・徳川勢力により滅亡し、駿河の武田遺領は徳川家康が領有した。徳川氏時代に駿府城は近世城郭として築城し直され、この時に初めて天守が築造されたという。その後1590年（天正18年）には、豊臣政権による後北条氏滅亡に伴う家康の関東移封が行われ、徳川領国と接する駿府城には豊臣系大名の中村一氏が入城する（甲斐の甲府城にも、同様に豊臣系大名が配置されている）。

江戸時代初期、家康は徳川秀忠に将軍職を譲り、大御所となって江戸から駿府に隠居した。ただし名目上は家康の子の頼宣による駿府藩50万石、ということになっている。このとき駿府城は天下普請によって大修築され、ほぼ現在の形である3重の堀を持つ輪郭式平城が成立した。天守閣は、石垣天端で約55m×48mという城郭史上最大のものであった。しかし1607年（慶長12年）に、完成直後の天守や本丸御殿などが城内からの失火により焼失した。その後直ちに再建されたが、1610年（慶長15年）再建時の天守曲輪は、7階の天守が中央に建つ大型天守台の外周を隅櫓・多聞櫓などが囲む特異な構造となった。1616年（元和2年）に駿府城で家康が没するまでの大御所政治時代、駿府は江戸と並ぶ政治・経済の中心地として大いに繁栄した。

駿府城の天守は3度建てられた。まず、天正年間（1573年 － 1592年）または1589年（天正17年）に建てられた天正期天守。次が、1607年（慶長12年） の慶長1期天守で、この天守は完成後まもなく焼失した。最後は、その翌年から1610年（慶長15年）に再建された慶長2期天守である。1896年（明治29年）まで現存した天守台は、この慶長2期のものである。

天正期天守に関しては小天守があったという記録のみで、慶長1期天守も資料が少ない。そのため、現在主に研究対象とされているのは、駿府城最後の天守となった慶長2期天守である。大日本報徳社蔵の『駿州府中御城之図』より、淀城の天守と同じく天守台に余裕を持たせて天守をほぼ中央に建て、4隅に二重櫓を建てて多聞櫓を建て廻したという説が最も有力とされている。この説に対して、2階に廻縁高欄があること、家康が富士山の眺望を無視するはずがないことなどから疑問も指摘してされている。

現在では、天守・櫓・門などの建造物や三重の堀のうち外堀の三分の一と内堀（本丸堀）は埋め立てられて現存していないが、残された中堀・外堀の石垣が往時の姿を留めている。また、外堀と中堀の間にある旧三ノ丸には官庁や学校などの公共施設が立地し、中堀の内側にある旧二ノ丸・本丸は「駿府城公園」として整備されている。

1989年に市制100周年の記念事業として二ノ丸南東の巽櫓（たつみやぐら）が、1996年には東御門（櫓門）と続多聞櫓が日本古来の伝統的在来工法によって復元された。内部は資料館となっており見学することができる。なお、天守台は明治時代に陸軍歩兵第34連隊を誘致する際に破壊されたが、同時に埋められた内堀（本丸堀）は部分的に発掘され保存されている。また、2014年（平成26年）3月末には二ノ丸南西角に坤櫓（ひつじさるやぐら）も復元された。

久能山東照宮

御社殿(権現造：国宝)

久能山東照宮は、日本の静岡市駿河区根古屋に所在する神社である。晩年を駿府で過ごした徳川家康が元和2年（1616年）に死去した後、遺命によってこの地に埋葬された。

江戸時代には20年に一度、明治時代以降では50年に一度、社殿を始めとした諸建造物の漆塗り替えが行われており、近年では2006年（平成18年）に社殿の塗り替えが完了した。 2010年（平成22年）12月に、本殿・石の間・拝殿が国宝に指定された。2015年（平成27年）には鎮座400年を迎えたため、様々な催し物が企画、開催されている。

久能山（標高216m）は、もともと日本平と共に、太古、海底の隆起によって形成されたもので、長い年月の間に浸食作用などのために硬い部分のみが残り、現在のように孤立した山となった。 推古天皇（592- 628年）の頃、久能忠仁が久能寺を建立し、奈良時代の行基を始め、静岡茶の始祖といわれる円爾（聖一国師）など、多くの名僧が往来し、隆盛をきわめた。

永禄11年（1568年）、駿府へ進出した武田信玄は、久能寺を矢部（静岡市清水区）に移し（今の鉄舟寺）、この要害の地に久能城を築いた。しかし、武田氏の滅亡と共に駿河は徳川家康の領有するところとなり、久能城もその支配下に入った。

家康は、大御所として駿府に在城当時、「久能城は駿府城の本丸と思う」と、久能山の重要性を説いたといわれる。死後、その遺骸は遺命によって久能山に葬られ、元和3年（1617年）には2代将軍・秀忠によって東照社（現・久能山東照宮）の社殿が造営された。家康の遺命は久能山への埋葬および日光山への神社造営であったので、日光山の東照社（現・日光東照宮）もほぼ同時期に造営が始まっている。日光山の東照社は3代将軍・家光の代になって「寛永の大造替」と呼ばれる大改築がされ、徳川家康を祀る日本全国の東照宮の総本社的存在となった。同時に家光は久能山の整備も命じており、社殿以外の透塀、薬師堂(現・日枝神社)、神楽殿、鐘楼(現・鼓楼)、五重塔(現存せず)、楼門が増築された。

なお、駿府城代支配の職である久能山総門番として代々久能の地を領して久能山東照宮を管理したのは、交代寄合の榊原家宗家であった。造営以来の多くの建造物が現存するが、寛永期に徳川家光が造営を命じた五重塔は、明治時代初期の神仏分離によって解体を余儀なくされた。

久能山東照宮博物館

博物館外観

家康公の西洋時計（重要文化財）

久能山東照宮博物館は、徳川家康を祀る久能山東照宮に付属した博物館。家康が関ヶ原合戦で用いた甲冑である「重要文化財　歯朶具足」、二代将軍秀忠が久能山東照宮に奉納した「国宝　桐紋絲巻太刀拵（国宝　太刀　銘真恒　拵）」、家康の神像である「東照大権現像」など、家康をはじめとする江戸幕府の歴代将軍に関係する文化財を２０００点超収蔵している。

注目！

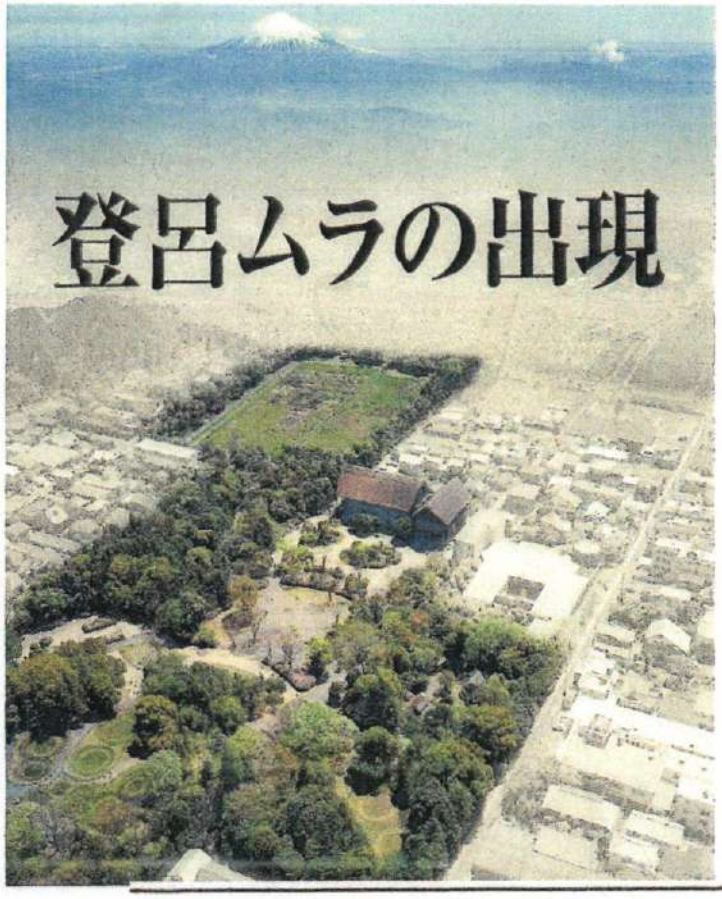
「家康公の西洋時計」は必見です。これは、家康が「スペインの王様から贈られた」歴史上大変貴重な西洋時計です。１６世紀のヨーロッパ製の置時計で、日本の宝であり、世界の宝でもあります。

時計は１６世紀において、あまりにも高価で王室でも数台しか持てない、最先端技術の結晶でした。大航海時代、時計は最も重要な「武器」でしたので、ヨーロッパ各国がその技術に大変な投資をしました。

この時計は元々数が少なかったものの一つです。ただ、技術の初期段階なのでそんなに正確ではなく、毎日巻かないといけません。歯車１個、ねじ１つが「全部手作り」です。ヨーロッパに残ったならば後の時代に改良されたでしょう。また、歯車が時を刻むうちに消耗し、新品に替えられていったはずです。

この時計は数年だけ家康の手元にあったものの、没後は神様となった家康の遺品として久能山東照宮の宝庫に保管されました。二度と使用されなかったので、ほぼ１６世紀のままです。ヨーロッパと違う文化の日本にあったおかげで、元のままの技術、その構造を確認できる唯一の１台であると、世界の古時計の権威大英博物館の時計コレクションのキュレーターからお墨付きを得ました。

去年、この時計が保存修理されたとき、ゼンマイまでもがオリジナルだとわかりました。この時計の価値の１つは４００年間ずっと動いていないことなので、あえて動かさないことが決まったのです。



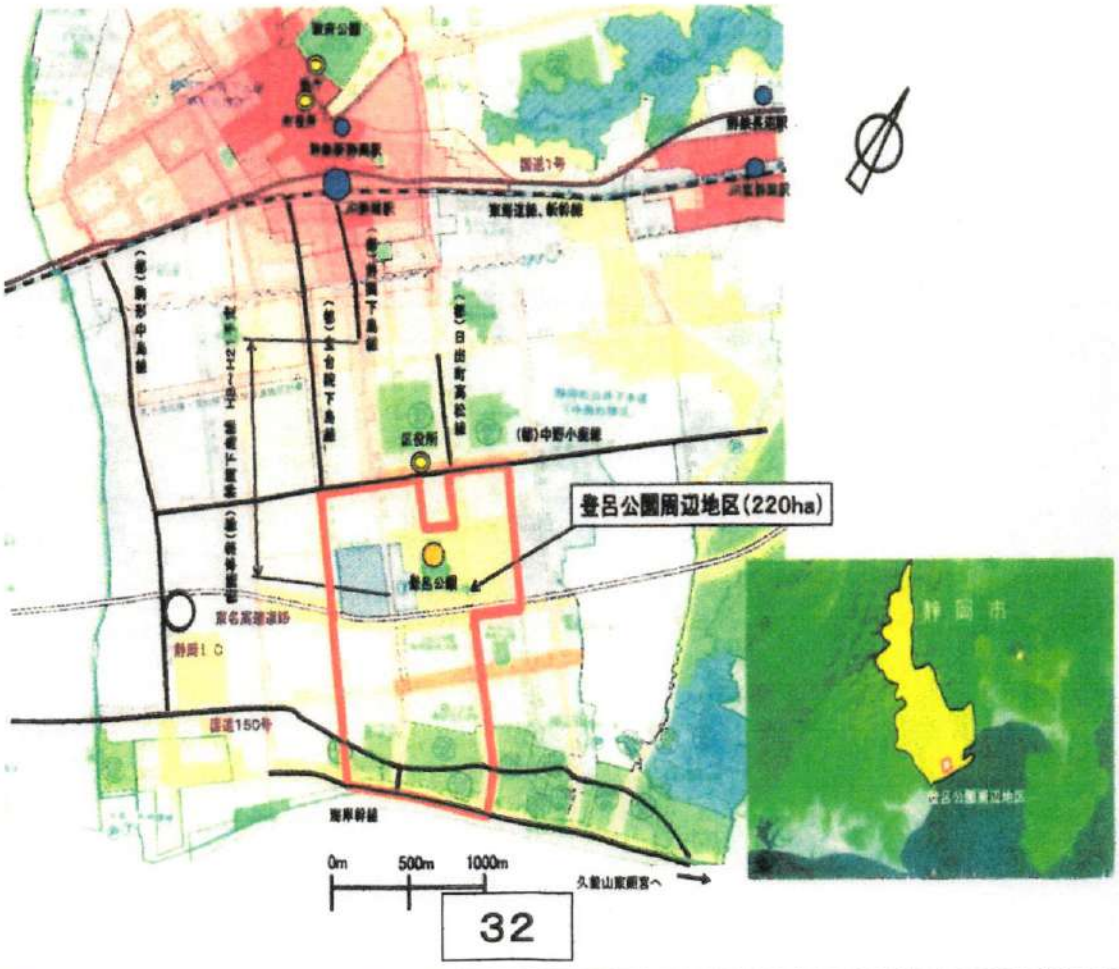
登呂遺跡（登呂公園）

静岡市駿河区登呂5丁目

弥生時代後期（1世紀頃）の集落・水田遺跡

1952年（昭和27年）に国の特別史跡に指定された

南東部に隣接して汐入遺跡がある（古代には入り江となっていたと見られる）



登呂遺跡の概要

遺跡は戦時中の1943年(昭和18年)、軍事工場建設の際発見された。戦後間もない1947年(昭和22年)には考古学・人類学・地質学など各分野の学者が加わった日本で初めての総合的な発掘調査が行われ、8万平方メートルを超える水田跡や井戸の跡、竪穴式住居(正確には竪穴系平地式住居)・高床式倉庫の遺構が検出された。この他にも農耕や狩猟、漁撈のための木製道具や火起しの道具、占いに用いた骨などが出土した。また1999年(平成11年)から5か年計画で再発掘調査が行われ、新たに銅釧や漆が塗られた槽づくりの琴、祭殿跡などが出土している。
登呂遺跡は安倍川の分流の洪水時に押し流された土砂が堆積し、自然に形成された堤防の上に造られている。
ムラは北東から南西の方向に拡がる微高地を利用して住居12棟、高床式倉庫2棟が建っており、水田は、その南側につくられている。

汐入遺跡:南東部に接続する汐入遺跡は外海に面したラグーン(潟湖)の港であった。(丸木舟の舳先が出土した)
　柵や溝で方形に区画された空間に独立棟持柱付の掘っ立て柱建物を検出した。
(首長居館あるいは祭殿の可能性がある)

登呂遺跡発掘調査の経緯と意義

「土の中に日本があった―登呂遺跡から始まった発掘人生―」

大塚初重（明治大学名誉教授） より

・1943年（昭和16年）軍事工場建設を前に安西国民学校の教員であった安本博氏が毎日新聞の協力を得て県や文部省に働きかけ、東京帝大が2回（17日間）緊急発掘調査を行った。住居址（1）倉庫址（1）水田を検出したが遺物は空襲により焼失。

・1947年（昭和22年）夏から4年間、明治大学（後藤守一、杉原荘介、）が中心となり、東京の各大学や地元の協力も得て総力を挙げて取り組んだ。（明治大・文化専門部の学生であった大塚氏も書記として参加）

「平和・文化国家日本の再建」という意識が全員の共通目標となっており、戦後日本の考古学の原点ともなった。

また、この発掘が契機となり翌年、日本考古学協会が設立された。

『空腹、酷熱、重労働の三重苦』『登呂のスイトンはスイ（つゆ）ばかりでトン（団子）がない』

『本土は米軍の空襲でやられたけど、弥生の人々のモノはちゃんと遺っており、祖先の息づかいが感じられる。日本は滅んでなんかいない』

・1999年（平成11年）から5年間、再整備と再発掘調査が行われ、大塚氏が委員長として「登呂ムラ長（おさ）」に任命された。

1947年当時の新聞報道

発掘風景